

# 成人の学習行動の構造 —学習内容と学習方法—

浅井 経子

Structure of Adult Learning : Learning Contents and Methods

ASAI, Kyoko

キーワード：生涯学習、ユールの関連係数、性、年齢、都市規模

## はじめに

学習支援事業を立案する際には人々のニーズや生活課題、生活条件等を探り、それらに即して事業を組み立てる必要があることは、これまでもさまざまなかたちで指摘されてきた。しかし、人々のニーズや生活課題、生活条件等を的確に捉えることは決して易しいことではなく、経費や労力をかけて調査等を実施しそれに基づき事業を立案しても、実際には期待したほどには事業の成果が得られないということはよくあることである。

もちろん、人々のニーズ等に応えることができればそれで十分ということではなく、特に公的な財源に基づく事業の場合は地域課題解決等にどう取り組むかといった観点が重視されている。ただし、そのような場合でも、生涯学習は人々の自発的な意思を前提としているだけに事業が人々に受け入れられなければ意味はなく、人々のニーズや生活課題、生活条件に即した事業の展開が事業の成否の鍵を握っているともいえるであろう。

そのため、これまでも人々の学習行動や学習ニーズの分析はさまざまなかたちで行われており、それらの動向のおおよその姿は把握されている。しかし、学習行動や学習ニーズの要素間の関係と構造については十分に明らかにされているとは言い難い。そこで、本稿では実際に行われている学習内容と学習方法を取り上げて、要素間の関係と構造の一端について検討してみることにする。

## 1 研究の目的と方法

学習内容と学習方法の関係を明らかにする方法として、調査を実施して、その結果をクロス集計で分析するのが一般的である。さらに、多変量解析等が開発されているので、それらを使って複雑な要因間の関係を明らかにする手法もとられている。しかし、クロス集計では事象の全体構造が見えにくく、多変量解析等による分析の場合は生のデータを使う必要があり、経費や労力の面から全国調査の実施は容易ではないので、限られたサンプルの分析に甘んじなければならないという限界がある。むしろ、多種多様な調査が国レベルで実施されているので、その結果をうまく使って要因間の関係を分析し、事象の構造を明らかにすることができれば、より効率的であろう。

そこで、今回は一つの試みとして、ユールの関連係数<sup>(1)</sup>を使って、学習内容と学習方法の要素間の関係と構造を明らかにすることにした。分析に用いるデータは、平成20年度に実施された内閣府「生涯学習に関する世論調査」のデータである。

ユールの関連係数を使う場合も、さまざまな観点が考えられる。今回は最も基本的な観点として、性、年齢、都市規模を取り上げることにした。性や年齢は成人の社会的役割や生活条件等に影響を与えており、それらによって学習内容や学習方法にかなりの違いが生じていることはクロス集計などでも既に明らかにされている。一方、都市規模を取り上げたのは、少子高齢化に伴い地域格差が拡大しており、学習行動の実態、さらには学習支援の実態でもかなり差が出てきていると考えられたからである。

ユールの関連係数を算出する際の年齢、都市規模の分け方であるが、年齢については団塊の世代の退職後の生き方が社会のさまざまな領域で期待されているので「59歳以下」と「60歳以上」に分け、都市規模については地域格差が反映されかつサンプル数の偏りを最小限に抑えることを考えて「大・中都市」と「小都市・町村」に分けることにした。

## 2 学習内容と学習方法の関係

まず学習内容と学習方法の関係について、クロス集計からみてみよう。表1は当該内容の学習を行っている人の中でのそれぞれの学習方法の比率を示したものである。

学習者全体では「自治体の講座や教室」「民間の講座や教室、通信教育」「自宅での学習活動（書籍など）」等で学習している人がそれぞれ30パーセント前後を占めている。また、「同好者による集まり、サークル活動」「職場の教育・研修」「パソコンやインターネットなど」も20パーセントを超えている。

学習内容別にみると、「趣味的なもの」の場合、「自治体の講座や教室」「民間の講座や教室、通信教育」といった学習方法が40パーセント近くに達しており、「教養的なもの」の学習の場合は「自治体の講座や教室」「自宅での学習活動」といった学習方法が40パーセントを超えている。また「健康・スポーツ」の学習でも「民間の講座や教室、通信教育」「同好者による集まり、サークル活動」「自治体の講座や教室」が30パーセント台後半となっている。

「家庭生活に役立つ技能」や「育児・教育」の学習では、ともに「自治体の講座や教室」「自宅での学習活動」で学習している人が多く、40パーセントを超えている。

一方、「職業上必要な知識・技能」の学習の場合は、「職場の教育、研修」と答える人がおよそ3人に2人いて、他の学習方法の比率を引き離している。また、「パソコン・インターネット」に関する学習では、「パソコンやインターネットなど」で学習している人が約60パーセントに達している。

「ボランティアのための知識・技能」では「自治体の講座や教室」「同好者による集まり、サークル活動」が、「自然体験や生活体験等の活動」では「自治体の講座や教室」「自宅での学習活動」が45パーセント以上の比率となっているし、「学校の正規課程での学習」の場合は「学校の正規課程」「自宅での学習活動」が50パーセント前後の比率となっている。

このように個々の学習内容について、学習者がどのような学習方法をとって学習しているかは表1から読みとることができる。しかし、表1からでは学習内容と学習方法の関係の全体構造はわからない。そこで、次にユールの関連係数を使って、学習内容と学習方法の関係の全体構造をみてみることにしよう。

成人の学習行動の構造

表1 学習内容別にみた学習方法

(%)

	講座や教室の自治体	民間の講座や教室、通信教育	(書籍など)自宅での学習活動	同好者による集まり、サークル活動	職場の教育、研修	パソコンやインターネットなど	美術館、博物館	ラジオやテレビ	学校公開講座や教室	学校の正規課程	その他	わからない
したことがある(小計)	33.1	29.3	29.3	26.8	22.6	21.3	14.5	10.4	9.7	3.7	4.3	0.6
趣味的なもの	39.6	37.1	34.1	33.0	18.4	21.4	19.0	12.4	9.3	3.0	3.8	0.3
教養的なもの	40.4	36.7	45.7	30.3	28.7	31.9	39.4	24.5	22.3	5.9	2.1	0.5
健康・スポーツ	36.8	37.5	30.3	37.5	25.7	25.2	16.7	13.3	11.4	2.7	3.6	0.2
家庭生活に役立つ技能	42.9	40.3	44.8	35.7	21.4	30.5	25.3	16.9	14.3	1.3	1.9	0.0
育児・教育	46.0	35.6	42.5	33.3	37.9	36.8	36.8	25.3	26.4	4.6	1.1	0.0
職業上必要な知識・技能	23.5	32.9	38.8	22.4	65.3	38.8	26.5	18.2	15.9	4.7	1.2	0.6
パソコン・インターネット	26.4	35.3	47.3	28.3	42.2	59.7	22.1	17.8	12.8	4.7	1.6	0.4
ボランティアのための知識・技能	48.4	33.3	31.0	45.2	31.7	27.0	23.0	15.9	19.8	3.2	5.6	0.0
自然体験や生活体験等の活動	47.3	40.5	45.9	50.0	37.8	37.8	35.1	20.3	18.9	2.7	5.4	0.0
学校の正規課程での学習	31.0	24.1	48.3	17.2	17.2	17.2	27.6	3.4	41.4	51.7	3.4	0.0
その他	27.3	18.2	9.1	9.1	0.0	9.1	0.0	9.1	0.0	0.0	36.4	36.4

内閣府「生涯学習に関する世論調査」(平成20年5月調査)110頁より作成。

### 3 学習内容、学習方法の構造

性(男/女)、年齢(59歳以下/60歳以上)、都市規模(大・中都市/小都市・町村)の観点からユールの関連係数を使って学習内容、学習方法の構造をみたものが、図1である<sup>(2)</sup>。なお、先にみた学習内容や学習方法のクロス集計など、学習行動や学習ニーズの比率は、一般には学習者あるいは学習希望者の中での比率を用いる。それは内閣府「生涯学習に関する世論調査」でも同様である。しかし、ここではより関係が明確になるよう、それぞれのカテゴリーについて回答者総計の中で当該学習を行っている実数と行っていない実数をもとにしてユールの関連係数を算出した。

図1では11の学習内容、学習方法が3次元空間に布置されており、距離が近いカテゴリー同士は性、年齢、都市規模の観点で似た傾向を有している。

x軸は性の軸で、プラスの値が大きいほど男性がよく行っている学習内容、学習方法であることを示し、マイナスの値が大きいほど女性に多い学習内容、学習方法であることをあらわしている。

y軸は年齢の軸で、プラスの値が大きいほど59歳以下の若年・中年層がよく行っている学習内容、学習方法を、マイナスの値が大きいほど60歳以上の高齢層でよく行われている学習内容、学習方法であることを示している。

z軸は都市規模の軸で、プラスの値が大きいほど大・中都市でよく行われている学習内容、学習方

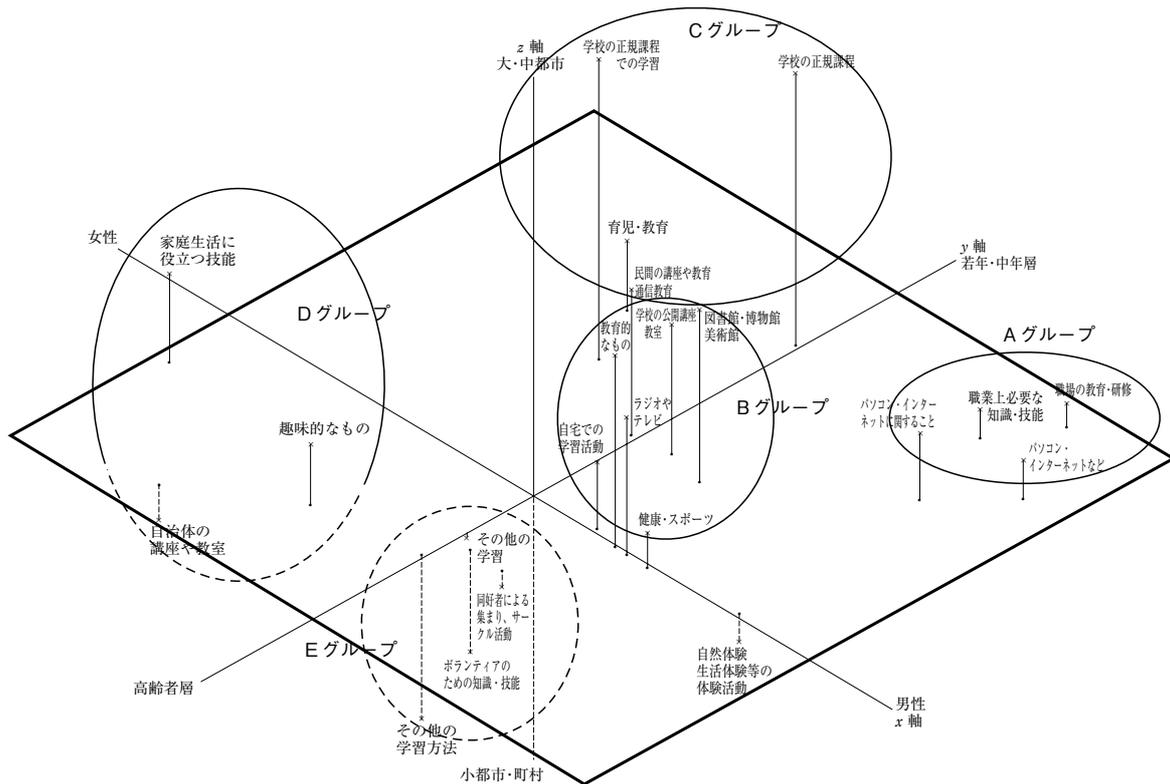


図1 性、年齢層、都市規模の観点からみた学習内容・学習方法の構造

法であり、マイナスの値が大きいほど小都市・町村でよく行われている学習内容、学習方法となっている。

11の学習内容、学習方法は、図1に示された距離からおよそ5つのグループに分けられるように思われる。ここではそれをA～Eグループと名付けることにしよう。

まずはAグループであるが、若年中年層の男性で比較的好く行われる傾向が強い学習内容、学習方法で、「職業上必要な知識・技能」や「パソコン・インターネットに関するもの」といった学習内容と「職場での教育、研修」「パソコン・インターネットなど」で行う学習方法から構成されている。このグループに属する学習内容、学習方法はどちらかといえば大・中都市で行われる傾向がみられる。

Bグループはどちらかといえば男性型で、若年中年層あるいは年齢ではあまり差がみられない学習で、大・中都市でよく行われる傾向がみられる。具体的には「健康・スポーツ」「教養的なもの」といった学習内容、「図書館・博物館・美術館」「自宅での学習活動（書籍など）」「ラジオやテレビ」「学校の公開講座や教室」といった学習方法である。

Cグループは女性、若年中年層、大・中都市で比較的好く行われている学習で、学習内容が「学校の正規課程での学習」「育児・教育」、学習方法が「学校の正規課程」「民間の講座や教室、通信教育」となっている。

Dグループは、女性、高齢層に多い学習で、都市規模による差はあまり見られない。「家庭生活に役立つ技能」「趣味的なもの」といった学習内容と「自治体の講座や教室」といった学習方法から構成されるグループである。

Eグループは、性差はあまりないがどちらかといえば高齢層、小都市・町村で多い学習で、「ボランティアのための知識・技能」「その他」といった学習内容、「同好者による集まり、サークル活動」「その他」といった学習方法から成るグループである。

このように、ユールの関連係数を使うことで、カテゴリー同士の関係を距離で表すことができ、全

体構造を明らかにすることができる。例えば、「趣味的なもの」の位置や「育児・教育」と「家庭生活に役立つ技能」が離れた位置にあること、Cグループの存在などはクロス集計ではなかなか見極めることは難しいように思う。なお、BグループとCグループの境界にはあいまいなところがあり、見方によっては若干異なるグループ分けも可能なように思われる。

## おわりに

本稿ではユールの関連係数を使って、クロス集計からでは見えなかった学習内容と学習方法の関係と構造の一端を解明しようと試みた。もちろん、どのような観点からユールの関連係数を算出するかによって構造は異なるものになることはいうまでもない。

ただし、このような分析結果を事業の立案に直ちに生かしたとしても、有効な事業の実現が可能かといえば決してそうではないであろう。調査結果と実際の行動の間にはずれがあり、人間の意思は小さなきっかけにも影響を受け、大きく変わってしまうほど不安定であるからである。また、人々の意識、生活課題や条件は多様化、複雑化しており、要因が複雑に絡み合っているため、限られた観点ですべてを明らかにすることは不可能に近い。その意味で、事象の要因を多面的に捉え、さまざまな観点から分析し、その成果を蓄積していく必要がある。

## 【注】

- (1) ユールの関連係数Qは、2つの属性間の関連性の程度をあらわすものである。A、B 2つの属性があって、それぞれが2つのカテゴリーにわかれているとき、その度数分布は次のような四分表になる。

	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	計
A <sub>1</sub>	a <sub>1</sub> b <sub>1</sub>	a <sub>1</sub> b <sub>2</sub>	
A <sub>2</sub>	a <sub>2</sub> b <sub>1</sub>	a <sub>2</sub> b <sub>2</sub>	
計			N

もしAとBの間に何らかの関係があり、A<sub>1</sub>はA<sub>2</sub>よりB<sub>1</sub>を導きやすいとすると、度数は当然 a<sub>1</sub>b<sub>1</sub>と a<sub>2</sub>b<sub>2</sub>で多くなる。もし両者の間に関連性がないとすると、度数は公平に分布する。ユールの関連係数Qはこのような関連性の程度を図る係数の一つで、次の式で定義される。

$$Q = \frac{a_1 b_1 \times a_2 b_2 - a_1 b_2 \times a_2 b_1}{a_1 b_1 \times a_2 b_2 + a_1 b_2 \times a_2 b_1}$$

-1 ≤ Q ≤ +1 の値をとり、無関連のときにQ = 0を、正負の最大関連のときはQ = ±1をとる。安田三郎『社会統計学』丸善、1969等を参照のこと。

- (2) 学習内容、学習方法の性別、年齢(59歳以下/60歳以上)別、都市規模(大・中都市/小都市・町村)別のクロス集計の結果は表2～表7の通りである。なお、これらの表では本調査の回答者総数に対する比率に換算したものを示した。そのため、100パーセントを超えるところもある。

表2 性別にみた学習内容—本調査の回答者の中での比率— (%)

	学 習 者	健康・ スポーツ	趣味的な もの	パソコン・ インター ネットに 関すること	教養的 なもの	職業上 必要な 知識・ 技能	家庭 生活に 役立つ 技能	ボラン ティア のための 知識・ 技能	育 児・ 教育	自然 体験や 生活 活動	学 校の 正規 課程 での 学習	そ の 他
全 体	47.2	22.5	88.1	70.7	72.9	91.2	90.3	82.1	68.1	85.1	40.0	37.5
男 性	47.7	55.8	62.8	112.6	62.8	102.5	33.1	177.5	52.1	154.1	22.8	46.2
女 性	46.8	40.8	117.3	45.1	88.1	77.5	173.9	55.0	84.8	48.2	66.7	33.3

表3 年齢別にみた学習内容—本調査の回答者の中での比率— (%)

	学 習 者	健康・ スポーツ	趣味的な もの	パソコン・ インター ネットに 関すること	教養的 なもの	職業上 必要な 知識・ 技能	家庭 生活に 役立つ 技能	ボラン ティア のための 知識・ 技能	育 児・ 教育	自然 体験や 生活 活動	学 校の 正規 課程 での 学習	そ の 他
20 ~ 59 歳	48.4	46.1	75.9	101.7	58.8	122.1	61.2	80.6	98.5	67.5	46.4	28.7
60 歳以上	45.3	50.1	106.8	37.7	113.1	43.0	218.0	82.5	35.0	142.9	27.5	63.6

表4 都市規模別にみた学習内容—本調査の回答者の中での比率— (%)

	学 習 者	健康・ スポーツ	趣味的な もの	パソコン・ インター ネットに 関すること	教養的 なもの	職業上 必要な 知識・ 技能	家庭 生活に 役立つ 技能	ボラン ティア のための 知識・ 技能	育 児・ 教育	自然 体験や 生活 活動	学 校の 正規 課程 での 学習	そ の 他
大・中都市	48.5	47.8	90.1	72.0	80.6	79.6	94.0	67.2	83.5	76.0	52.4	31.0
小都市・町村	44.9	47.2	84.5	68.4	55.7	124.1	83.9	115.7	49.8	107.1	16.9	86.4

表5 性別にみた学習方法—本調査の回答者の中での比率— (%)

	自 治 学 校 の 講 座 や 教 室 の	民 間 の 講 座 や 教 室、 通信 教育	(自 宅 で の 学 習 活 動 — 書 籍 な ど)	同 好 者 に よ る 集 ま り、 サー クル 活 動	職 場 の 教 育、 研 修	パ ソ コ ン や イ ン タ ー ネ ッ ト な ど	美 術 館、 博 物 館、 図 書 館	ラ ジ オ や テ レ ビ	学 校 の 公 開 講 座 や 教 室	学 校 の 正 規 課 程	そ の 他
全 体	15.6	16.4	16.0	14.7	12.2	11.3	7.6	5.3	4.8	1.8	2.1
男	10.9	12.5	141.2	110.6	96.6	105.2	52.1	39.9	62.3	27.0	37.6
女	19.5	14.9	64.5	78.0	57.6	54.8	84.5	65.4	71.0	44.9	50.5

表6 年齢別にみた学習方法—本調査の回答者の中での比率— (%)

	自 治 学 校 の 講 座 や 教 室	民 間 の 講 座 や 教 室、 通信 教育	(自 宅 で の 学 習 活 動 — 書 籍 な ど)	同 好 者 に よ る 集 ま り、 サー クル 活 動	職 場 の 教 育、 研 修	パ ソ コ ン や イ ン タ ー ネ ッ ト な ど	美 術 館、 博 物 館、 図 書 館	ラ ジ オ や テ レ ビ	学 校 の 公 開 講 座 や 教 室	学 校 の 正 規 課 程	そ の 他
59 歳以下	11.8	15.5	123.6	72.4	101.9	116.6	51.8	35.0	67.4	50.8	32.7
60 歳以上	21.5	11.2	58.7	132.2	32.8	36.3	133.6	100.1	65.1	15.4	68.9

成人の学習行動の構造

表7 都市規模別にみた学習方法—本調査の回答者の中での比率—

(%)

	自治体の 講座や教室の	民間の講座や 教室、通信教育	自宅での学習活動 (書籍など)	同好者による集まり、 サークル活動	職場の教育、研修	パソコンやインターネットなど	美術館、博物館、 図書館	ラジオやテレビ	学校 公開講座や教室の	学校の正規課程	その他
大・中都市	14.7	16.0	99.9	78.1	76.5	83.8	71.2	53.5	64.7	39.7	31.1
小都市・町村	17.3	10.0	70.9	129.1	79.1	72.8	50.1	38.5	71.3	25.0	78.6

(受理日：2010年3月9日)

